

## グシイの災因論

——とくに妖術と死霊をめぐって

松園 万亀雄

本稿の目的はケニア南西部、バントゥ系グシイ人における災因論を、妖術と死霊を中心に素描することにある。

グシイにおいては死や難病・重病は、家族関係の不調、家畜の死、農耕の不作などとともに同一の不幸のカテゴリーに属し、それらは究極的には超自然的原因により発生するものとかんがえられている。種々の超自然的災因のうち特定の災因が特定の不幸や症状をひきおこすとの考えは稀薄である。したがって、たとえば女子の不妊と家畜の斃死が、おなじ妖術という原因によって説明されることもある。

本稿では、まず(1)グシイにおける近代的——『自然』——医療の状況を概観し、つぎに(2)私の調査地マソ

ンゴから得た死と超自然的死因についてのデータを提示し、<sup>(1)</sup>最後に(3)グシイの超自然的災因論のなかで最も重要な妖術と死霊についてその概要をしめすことにする。<sup>(2)</sup>

### 一 近代的医療

超自然的信仰にもとづく諸観念とは関係のない、純粹に疾病の除去を目的とした治療法もグシイではさかんにおこなわれている。この種の治療にたずさわる伝統的専門家は施薬師(omonyamorigo)とよばれ、外傷・捻挫・性病・下痢・頭痛・気管支炎・心臓病など、さまざまな症状にたいする塗布薬・水薬・煎剤・粉薬をもっている。邪術をつかうことのできる呪医(omonyamosira)

は、妖術者 (omorog) と泥棒を攻撃するための呪物 (omotra) を処方するのを重要な職務とするが、そうした依頼をもちこむ者は例外なく遠隔地の人間であり、彼らはじぶんの居住地近辺では右の施薬師と一見かわらぬ活動をしている。

グシイには頭蓋骨破損の治療を専門とするオモバリ (omobari) とよばれる特異な外科医が存在する。近年はその数が激減したらしく、私は手術の現場をみたことはないが、マソング周辺では手術の跡をのこした男一名、女二名を確認した。男は、かつて地区の長をしていたころ、ある青年を長老裁判の場に引出そうとして争った折棍棒で頭を割られたと語り、また二人の女はいずれも夜間出歩いていたところ、妖術者と疑われ出会いがしらに打たれたとの噂だった。

西洋人のもたらした近代医学の普及はいちじるしく、病院での手術・注射・投薬等への信頼度は高い。若い女性の大半は病院で出産するし、いまでは小学校の休暇にあわせて十二月中旬におこなわれる男女の割礼も、白衣をまとった看護士・看護婦が病院の手術室で麻酔を打っておこなうことが多くなった。

グシイ県には国立総合病院が一つあり、県内各地に公立診療所がおかれている。いずれも無料で診察・治療してくれる。総合病院では何日間入院しても退院時に一五シリング (一九七七年当時、一シリングは約三〇円) 支払うだけであり、出産費も四〇シリングと安い。しかし高価な投薬はしてくれないし、大部屋に入院患者四―五〇人をつめこんでおり、また一般に医者や看護人の態度が横柄で不親切なことから人びとの評判はよくない。最も人気のあるのは白人医師をもつミッシン系病院であり、マソング近辺には三カ所ある。有料ではあるが、それほど高くはない。軽い症状なら国立病院、重病ならミッシンの病院というのが彼らの通常の選択である。

キシイ (県の行政中心地) には個人経営の病院が四カ所あるが、設備の不備と高価な治療費のため最も評価がひくい。

人びとは県内各種病院の特徴や治療費等についてことこまかな知識をもっており、症状、ふところぐあい、交通の便などを考慮して適宜行くべき病院をえらんでいる。調査地マソングの東南にあるオゲンボの診療所でみせてもらった一九八〇年の集計では治療件数の多い主な疾

病は順に、マラリア、呼吸器疾患、内臓寄生虫、下痢、皮膚病、火傷・骨折等の傷害事故、眼病、中耳炎などとなってゐる。このほかマソングでの見聞では、チフス・結核・赤痢・狂犬病・破傷風も頻発してゐるようだ。性病は蔓延してゐる。国立総合病院では性交相手の名を明かし、その相手を同伴しないかぎり治療に依じてくれないので無料診療を実際にうけることがむずかしいという事情があり、ききかじりの伝統本草学で自前の煎剤をつくり服用する青年もすくなくない。

キシイの町にかぎらず地方のどんな小さな商店でもマラリア・頭痛・風邪等の錠剤を常備しており、高価であるうえドラッグストアでも品切れになることの多いペニシリンや抗生物質については、まがいものや不良品ともわれるものがひそかに取引きされてゐる。

妊娠した未婚女子は、大量のマラリア錠と筆記用のインキを飲めば流産できるとの誤信が広まっており、それでも効き目がなければ少量のカマドックス（ウシのダニ駆除用の散布液）をのめばよいとされてゐる。農薬や殺虫剤による自殺も——そしておそらく殺人も——多い。石けんはそれ自体が清潔をもたらす薬品として使用され

てゐるフシがあり、石けんで歯をみがいたあと口ゆすぎをしないと、石けんのクズを浮かべた洗面器の水一杯でテーブルの全員が手を洗う——ときにはその汚れをすくってウガイする——といった光景もめずらしくない。

こうした誤用・誤信をふくめて西洋的な薬品・治療法にたいする人びとの信頼は絶大である。しかし、だからといって伝統的な治療体系が軽くみられたり、専門家たちの活動の場がせまくなったということではけつてない。むしろ伝統的な専門家・治療法・薬品——超自然信仰にかかわるそれらをふくめて——についてのゆるぎない信仰が、近代医学の領域にまで拡大され、病氣や医療についての概念カテゴリーが今世紀以降いっそう複雑化したのだとみるべきだろう。事実、従来も今も、死や病氣の原因を診断する占い師（*Onogorin*）、その原因を除去する呪医はグシイ人の生活に不可欠のものであるし、さまざまの異常事態や免脱行為を矯正し正常にもどすための儀礼では多種多様なクスリがもちいられてきた。また日常生活のなかの、たとえば性行為にかかわるクスリをとってみても、男のもちいる攻撃的催淫剤、夫の氣をひくために妻の服用する媚薬、反対に男の性的暴力をく

いとめ姿えさせるために女がこっそり仕こむ粉薬などは伝統的に多くの種類がつかわれてきた。これらのクスリは、さまざまの呪物と併用し、さらに侮蔑語を多用して相手を感乱させることにより、その効果がいつそう高まると信じられてきた。彼らの倫理と礼節にもとる他人のちよっとした逸脱行為も、しばしばクスリのせいになされる。たとえば、妻と肩をならべて外歩きをする男、妻のための衣料品やぜいたく品にはカネを出しても年老いた両親の面倒見はよくない男は、たいていは妻にアマエビ(amabi)とよばれるクスリを一服盛られたのだからと噂される。ようするにグシイ人は西洋文化との接触以前から、観念的にも事実上も、そうとうのクスリ漬けになつていたのでとかがえられる。

医療にかんする人びとの態度はプラグマティックなものであり、効果のありそうなものはなんでもためしみる。最初の療法が効かないと次つぎに別の療法をもとめ、こうして錠剤、注射、占い師の診断、呪医の処方するクスリと呪物、死霊への供犠などのため必死に駆けずりまわる。彼らには超自然的医療と自然的医療との境い目はないし、医療の論理の首尾一貫性は問題にならない。た

だし一部の症状については、近代医療と伝統医療のいずれかにより強く依存する傾向はみられる。外科手術の必要な負傷者や危篤状態にはいった病人はたいてい近代的病院にはこびこむ。その一方では、不妊、性的不能、精神障害、先天的不具は、死霊か妖術者がもたらしたとの信仰があるため、病院に行くことはまずなく、たいていは占い師、ついで呪医をたずねる。

グシイにとって超自然的療法と自然的療法は、多くの病氣にかんして完全に併存しうるものであり、病氣の原因については症状の程度とその推移によってさまざまの説明がひねりだされ、それらは二者択一的に突き合わされることなく、たいていはそのいずれもが有効な説明とみなされる。しかし病状が長びいて重くなったり死んだりすると、究極的には超自然的要因によって説明される傾向がいちじるしい。一見だれの目にも原因が明らかとみえる交通事故死や暴力ざたによる傷害致死さえ、妖術者の邪悪な力や、だれかの呪詛、あるいは虚偽の宣誓にたいする死霊の制裁が、加害者・被害者のいずれかに作用した結果だとみなされがちだ(後出事例⑫⑬を参照)。近代医療と伝統医療がグシイ各個人のかなで併存しう

る選択肢としてあるということは、いいかえればこの二つの医療体系が同一の症状にたいして競合ないし補充の関係に立っているということでもある。その点、近代医療との競合をさけつつ伝統医療に徹している七〇歳ほどのアベル・ニヤクンディ老人は特異な存在といえる。

マソングから東南東方向に約十キロの地点、キオゴロに住むニヤクンディは、一九七一年にSDA教会(セヴンスデー・アドヴェンティスト)の牧師を引退した直後、施薬師の道にはいった。彼はSDA信者として死霊、妖術者の存在や占い師、供犠の効用を信じない。治療の開始前と終了後には診療室のドアをとじ、SDA式の祈禱をとなえる。患者はニヤクンディの治療でなおるのではなく、彼は全智全能の神にちよっとした手助けをしてやっただけなのだと思っている。彼は近代的病院での治療効果はかばかしくない患者だけをみる。病院が失敗したところから自分の治療ははじまる、と彼はいう。初診の患者はすべて、それまでの通院歴と投薬を記載したホスピタルカードを持参し、通院中の症状の経過をまず告げなければならぬ。ニヤクンディは患者各人についてカルテをつけ、じぶんで採集した植物でつくった煎剂

をあたえ、同時に食事や衛生について忠告をあたえる。彼はマラリア・頭痛・喘息・背骨の痛み・皮膚病・結核・慣習的流産等にかぎって治療し、不妊・性的不能・精神疾患はじぶんの手におえないことを公言する。そして一定期間投薬を続けてなお効験のあらわれない患者にたいしては、かれの治療では望みがない旨を率直につげ、よそにいくようにいう。彼と患者との問答の内容、生殖の過程や諸器官の機能についての知識は、きわめて「科学的なもの」と私にはおもえた。

ニヤクンディの治療は伝統的な体系のなかの超自然的な要素をすっかり取り取り、そこにキリスト教の神の力をもちこんできたものであり、薬草類についての知識は彼が両親や施薬師仲間、および牧師時代にルオ人の伝統治療師からまなんだものが大部分という。アスピリンやペニシリン等の西洋医薬品はつかったことはなく、全然関心もない、とも。彼の患者はSDA信者だけではない。他の新教各派、ローマン・カソリックの信者もいるし、非改宗者もいる。SDA信者はカソリック信者以上に聖書の記載に忠実であり、脱伝統の姿勢がつよい。カソリック信者は日曜ミサに出かける以外は、伝統的信仰にひ

たされているという点で非改宗者と全然かわるところがない。彼らは死霊への供犠もおこなうし妖術・邪術への信仰もあいかわらず篤い。が、これらの患者層は新旧医学の区別立てに拘泥しない点では一致している。ニャクンディの治療は、医療にかんして幅広い受容力をもつグシイ人のプラグマティズムのなかで、それなりの高い評価をうけ大勢の患者をあつめているわけだ。

けれども、一般に超自然的治療にたよる面がいぜんとして強いために、実際に適切な診療をうけたときはすでに手おくれ、という事態が多いのは争えない事実である。死と病気は日常的なできごとだ。私がマソングで得た印象では、人びとは近辺の定期市に出かけるのと同じくらい、あるいはそれ以上の頻度で病院や呪医をたずねている——本人の受診のほか、患者の見舞いや、代行でクスリをとりにいくのをふくめて。

## 二 死と超自然——マソングからの事例

調査期間中、私はいくつかの葬礼に出席し、また出席しなくても死因をめぐる人びとの噂話をあつめた。全部で十五件。死者はマソングとその周辺の者である。

死者十五名は性別・既婚未婚別では、既婚男子十一、未婚男子一、既婚女子一、未婚女子二。偶然とおもいうが、私の滞在中は男子の死が女子のそれより圧倒的に多かった。事例でしめすように、男子の死の大半は妻や母などによる妖術のせいにされた。そのことが連続しておこったことから、死因をめぐる紛争が家族・近親内の男女対立の枠をこえて、広く地域全体の男女間の非難の応酬というかたちをとっていた。グシイ社会では、同世代（および隔世代）と隣接世代の区別、血族と姻族の区別とやらんで男女区別は対人関係の社会的距離を決定する重要な二項対立的要素となっている。特定の男女間だけでなく一般的カテゴリーとしての男女間の葛藤・対立・憎悪が儀礼・性的接近・日常会話・民話等の諸状況で表現される。したがって、死亡直後の通夜と翌日の埋葬の場における死因をめぐる男女間の声高ないさかいは、こうしたグシイ社会に普遍的な男女間対立に根ざしているものとかんがえられる。

十五の死を私なりに原因別に分ければ、病死七、老衰死一、交通事故死一、撲殺死二、自殺一、不明三である。不明のうち二は突発的な死で状況がわからず、一は明らか

かな精神異常者が呪医の家を逃げだして戸外で仆れ、のち遺体を発見されたものである。

十五の死にもなう葬礼——通夜・埋葬・告別式・服喪・喪明け、と続く——のすくなくとも一部に私が出席したのは七件だけ。死因についての人びとの解釈は死亡直後としばらくして後とでは変わることもあるし、また一つの死にたいして通常複数の異なる原因が示唆される。

特定個人と死者との関係いかんは、とうぜん前者のとなえる死因の内容に大きな影響をあたえる。死者とその家族にたいする私のラポールの程度と質によっても、あつめた噂話の質と量は異なってくる。それに私は死因説のそれぞれについて、その発生源たる人物を特定するために格別努力したわけでもない。したがって資料的価値の点からは全体にバラツキはあるが、死因探求にかんする人びとの一般的态度をするにはいくらか参考になるとおもうので以下に摘記する。妖術がらみ、邪術がらみ、呪詛がらみ、その他、の四種に分ける。

なお、「毒殺する」と「妖術をかける」という表現は、とくに前者が女子を加害者とするばあい、互換的にもちいられる傾向が強く、両者を区別することは事実上むず

かしい。彼らじしんも同一のカテゴリーとして扱っているようだ。被害者の毛髪・爪・排泄物・衣服の切れはし等をあつめてきて、これにクスリをしこみ、被害者の家の屋根、戸口、壁のすきまなどにそれを埋めこめば、それが屋内にいる被害者やその家族を病気にさせ死に至らしめる、というのが古典的な妖術のかけかたであり、いまでもそうした説明はさかんなされる。が、同時に、飲食物のなかに屍肉のかけらや毒をいれて、目あての被害者を直接的に殺したり発病させるのも、妖術者に特有の性向とみなされている。来客に飲食物をもてなすときはまず主人が毒味をする一般的な慣習も、彼が妖術者ではなく毒をしこんでないことを明示するためのものであり、子どもがよその家で食事をもらうのを親がきびしく禁じるのも妖術の被害をさけるため、との解釈が通常なされる。このほかブザ（ヒエもしくはトウモロコシのドブロク）パーティーにはいつも自分専用の吸入サイフォンをもち歩く者、ブザは毒をいれても目にみえないが透明な蒸溜酒のチャガならすぐわかるといのでチャガだけを飲む者、鼻タバコは鼻腔からノドを通すから危いというので鼻から吸わず口にいれて、しばらく味わたあと

ベツと吐きだす者など、私の出会ったこの種の間人はいずれも妖術者による毒の危険性をのべ、一部の者は実際に毒にあたった経験を語った。

以下で女による毒殺の嫌疑をいずれも「妖術がらみ」として分類したのは、実際に人びとが「妖術の行使」(odroeg)だと語ったからであり、事実、これらの死を契機として大半の容疑者(女)はマソンゴ周辺の要注意妖術者としてリストアップされるようになった。

### 1 妖術がらみ

① デイスマス(既婚男子、自殺)——デイスマスの妻は結婚以来、二度つづけて流産。占い師によれば妻ニャピアガはデイスマスの母に妖術をかけられているという。彼は呪医の邪術の力をかりて母の妖術に対抗しようとしたが、三度目も流産。そこで妻を母から引離すべくマソンゴの土地を売り、バッシ郡の義父の土地を買って移り住む。その後、男児一人出生。夫婦仲悪く、デイスマスは妻の肩をもつ義兄弟より放火、暴力をうけ長老裁判で争う。妻はケリテヨに逃げ、キプシギス人の男と同居。デイスマスはやがて奇矯な言動をするようになり、弟がマソンゴに連れ帰る。翌日、ステレドン(ウシの寄生虫

駆除剤)をのんで自殺。母親が直接に自殺に関与したとの情報はないが、妻の流産だけでなくデイスマス生前の異常な言動も母親の妖術によるものとの説もつばら。

② ラテモ(既婚男子)——以前から腹痛を訴えていた。死の前夜、酔って帰宅。夕食はいらないというのに妻ケルボが無理じいしてくわせた(同居中のケルボの弟の話)。その食事に毒がはいっていたにちがいない、と人びとの話。両親・兄弟の要求により死体解剖。胆汁の色と肝臓が乾いていたことから毒殺と判断される。その三年前のラテモの弟シエムの死もケルボのせいとされている。シエムは勤務先のキシイのバーに出かける直前、ケルボからコップ一杯のプザをもらいヒヤでのんだところ、バーに着くなり倒れて絶命。プザは熱湯をまぜ、ぬるくしてのむのがふつう。シエムはヒヤでのんだから毒の効果テキメンだったのだらうという。

③ ニャガウ(既婚男子)——肝臓病で入院をくりかえしたあげく自宅で死亡。発病じたいは、他人の畑での賃仕事から帰ったあとのもんだプザの毒が原因であり、この毒はニャガウの僚母の指示で彼の妻サピナが混入したとされる。埋葬当日、直接の死因について諸説紛々。故



人がマソング・マーケットに店を一軒建てたため、嫉妬され妖術をかけられた。サピナが入院中の故人を見舞うため家をあげたすきに故人の靴とラジオが盗まれた。それらを道具にして妖術をかけられた。二人目の妻をもろう算段をしていた夫をうらんでサピナが毒殺した、等々。最も容疑濃厚とされたのはサピナ。死の前日、サピナが呪医と家にいるところを故人のイトコのオトウオリが見、中に入ろうとして追ひ払われたという。死後の通夜をしているとき、故人の家にネズミが出たのでつかまえたらピッコのネズミだった。そして案の定、今朝、呪医が埋めたとおもわれる呪物をだれかが川の近くで発見した旨人づてにきいた、とオトウオリ。肝臓病にちがいないという長老たちの反対を押しきってオトウオリが死体解剖。長老たちは毒殺死とも病死ともその場では判断をしめさない。あとできくと、多くの人は胆汁の色からみて毒殺という。

④ マゲト（既婚男子）——肝臓病のため三つの病院に入院したがなおらない。占い師の指示にしたがい太陽（第三節末尾参照）と祖父の死霊に供犠してもなおらない。ついに自宅で死亡。故人の息子オバガが七年前重病

になり、病院でなおらず呪医の治療で回復した。その後、オバガはその呪医に弟子いりして修業、彼じしん呪医になり妖術に対抗できる力をつけた。そこで、それまで息子をねらっていた妖術者があきらめて、こんどは父のマゲトを標的にしたのだろう、と。妖術者は故人の妻マゴマであり、故人は生前、オボサロ（粉薬）をまぜた冷いブザを妻にのまされたと語っていたという。マゴマの母も妖術者で、夫を毒殺したとの噂。姻族は埋葬の数日後に弔問するものなのに、この母がブザ持参で故人の埋葬時にやってきたのは、娘マゴマとの共謀による毒殺を人びとに気づかされたため彼らの噴激をしずめるためだった、とも。埋葬の一週間後、故人の墓の盛土が陥没。ああ、やっばり、マゴマと母の手引きで妖術者の一団が死体を掘りだし屍肉をくったのだろう、との噂。

⑤ オサノ（既婚男子）——以前から胃痛を訴えていたが入院二週間後に死亡。数年前、近隣に住むシロンガに賃仕事をたのまれ、終了後食事をもらったときシロンガの妻ジェルサが人肉をまぜたため発病。故人の妻オセベがルオ人の占い師にそういわれたという。このため通夜のとき、オセベがジェルサを激しく詰問。一方、オサノ

夫妻は折合いが悪く、オセベは夫以外の男との性交渉も常に噂され、彼女が毒殺したとの意見も有力。第三の説は、故人はある夜ウシ泥棒の一団が盗んだウシを解体している現場にいきあい、その場で生肉をもらって、一団から離れた直後に彼らの名を大声で呼ばったため、これをききとがめた泥棒たちに全身を打たれ、それ以来病氣になり死に至ったというもの。

⑥アユカ（既婚男子）——心臓病のためチャガ・脂肪・砂糖の摂取を医者に禁じられていたという。自宅死亡。小学校教師。性格は凶暴。土地その他の財産侵害にからみ四人の異父兄弟に暴力。一人は殺され、一人は恐れてタンザニアに逃げ、二人は重傷。母、妻にも暴力。母アグネスは妖術者であり、かつて先夫とその兄弟を殺した嫌疑をかけられ実妹の家に逃亡。が、彼女のもちこんだ罪業（crime）のため実妹の家族も娘一人を残して全滅したという。またアグネスは先夫死亡の際供犠をせぬまま夫の異母兄弟に寡婦相続された（故人はつれ子）。故人の死因に三説。一、妖術者アグネスは最初のうち故人の凶暴さを利用して後夫との子を殺していたが、ついに故人にも手をかけた。二、アグネスが先夫の供犠を怠

ったため、その罪業が故人におよんだ。三、故人が異父兄弟たちと流血沙汰をおこしながら、そのうちの二人とは供犠と呪薬による正式の和解儀礼をおこなわぬまま「共食し、ともに散歩する」ようになったから。なお後の二説では、死霊の制裁はとくに言及されなかった。

⑦モラー（未婚女子）——夜、帰宅途中、妖術者らしい一団と出会い、顔みしりの数人の名を家で父オブウォーマにつげたところ、その場で卒倒、一週間後に病院で死亡。妖術者の一人はオブウォーマの次妻パンチリ（モラーの実母ではない）だったという。グシイの信仰では、出会った妖術者の名をその晩のうちに他人につげれば、妖術者が舞いもどり啞にしたり殺したりする。

⑧クイーン（未婚女子、中学三年）——所かまわず大声をはりあげるのでキシイ近くのスーダン人移住者部落の呪医のもとで治療中、逃げだして戸外で死亡。二人の女に妖術の嫌疑。一人はクイーンの実姉ケルボ。ケルボの夫と義父はともに妖術者で、彼女は結婚後彼らにそのかされて妖術の道にはいったとされる。もう一人は、クイーンと同名で同級生である近所の娘の母ニャンチャマ。じぶんの娘にくらべて成績のいいクイーンをねたん

でいたという。故人発病の直前、授業用のノートと衣類が盗れた。犯人はケルボともニヤンチャマともいう。

⑨ ナフタリ(未婚男子、中学三年)——死亡直前まで健康。二学期の授業料未納のため放校され自宅にいたが、父が授業料捻出のため土地を他人に賃貸。そこで学校の寄宿舎にもどるべく荷物をまとめてマタツ(乗合自動車)を待っていたが、マタツはこない。その日はあきらめて広場でサッカーをして遊び、夕方母の小屋に入り夕食を催促した直後、ドアの外で昏倒。病院にはこぼれる途中、車の中で絶命。ナフタリの父シゴンベの長妻(第一夫人)ノエロは名うての妖術者。ノエロはじぶんの子どもが大部分小学校卒なのに、次妻の息子ナフタリの中学校の授業料のために夫が土地まで他人に貸したことで次妻とナフタリをうらんでいた。

## 2 邪術がらみ

⑩ アカマ(既婚男子)——肺炎のため通院しきり。入院の翌日死亡。アカマの息子モゴバの妻は子が一人もできず、妻はかねてからアカマの妖術のせいにしてきた。ある日、アカマの家の方から死んだヘビがモゴバの敷地に投げこまれた。アカマが夫婦を殺そうとしているのだ

と妻はモゴバを説き伏せ、ヘビをもって呪医をたずねさせた。呪医はヘビに粉薬をまぶして地中に埋めた。アカマの死の直後、その妻(モゴバの実母)が占い師をたずねると夫は邪術のせいで死んだといわれ、帰ってモゴバを難詰。彼はじぶんの仕事をみとめた。アカマの埋葬直前、モゴバが全身の激痛を訴えた。きくと、呪医への支払いウシ八頭のところニワトリ一匹しか払わず、しかも呪医に重大な侮蔑語を浴びてきたという。さっそくウシ七頭をかき集めて使者をたて、呪医から水薬をもらってきてモゴバの頭に吹きつけると痛みはとまり、アカマの埋葬も無事終了。

⑪ サボイゴ(既婚男子)——呪医。病院で死んだが検死の結果は死因不明という。彼は隣人ジョンの娘を邪術で殺したといわれ、ジョンがそれをうらんで妖術をかけたので病気になった。このときサボイゴは呪医の治療をうけたのに代金的一部しか払わなかった。このたび病院に運びこまれる直前、同じ呪医をよびにやったが前回の代金未払いを理由に拒絶された。サボイゴの死は、この呪医による邪術のせいとされる。

## 3 呪詛がらみ

⑫レナード(既婚男子)——舗装道路の端で少年と口論中、マタツにはねとばされ、直後に病院で死亡。まっすぐ走ってきたマタツが急に左に寄ってレナードと少年をはね、レナードだけが死んだのは、彼に「なにかがあった」(Camanganana)からだろう。事故現場付近にヤマアラシの針が二本、タテにつないで地面に刺してあったという。レナードと父の間は険悪だった。レナードの妻ミアムはマタイトコ(父の父の姉妹の息子の娘)で婚姻禁止の範囲にはいるため、父は夫婦の同居に猛反対し、ミアムを四度も追い出そうとし、そのたびレナードと対立した。人びとは間接的には父の呪詛を示唆した——私の推測を否定しないという意味で——が、直接的な表現ではそれに言及しない。

⑬シガール(既婚女子)——息子オウルと、ネズミ捕り器をあずけた、あずからないで口論中、オウルの投げつけた草刈り長刀の柄が胸を直撃、その場で絶命。シガールと義父ニャコイロは不仲。彼女が無断で義父のコーヒー畑を収穫して売ったとき、義父は「おまえはきつとすぐに死ぬ」と呪詛したことがあった。また一説に、ニャコイロの父がかつて一族の男を殺したのに供犠をしな

いまま秘密にしておいたので、同じことを孫のオウルがくりかえしたのだ、と。

#### 4 その他

⑭ニャバサ(既婚男子)——仲間四人とウシを盗んで南モギランゴ郡の屠殺業者にひそかに売却。後者の家でブザの歓待をうけていたところを追手に発見され、彼だけが逃げおくれ撲殺された。このブザの席に近所の女が現われ、ニャバサが邪険に追い払った。女はしばらくして他の者だけを戸外に呼びだし、追手がひそんでいる旨を胸をただけて宣誓して逃がしてやったという。が、このことがニャバサの死と超自然的にかかわりがあるとの説明はとくにされない。

⑮アロリ(既婚男子)——三日間風邪をひき自宅で死亡。老衰死とおもわれる。「土の力により土にもどされた」とのみいわれ、妖術・邪術・死霊等との関連はいっさい言及されなかった。

### 三、災因としての妖術と死霊

グシイでは死をもたらず超自然力は、右の諸事例がしめすように多くのばあい妖術に起因するものとされる。

死別の状況において遺族たちは、故人が生前なした悪事や禁止違反のために、いわば自業自得によって死霊の制裁をまねき、あるいは他人の邪術をまねいたのだとは一般にかんがえない。死は圧倒的な傾向として、現存する他人の邪悪な意志——妖術——のせいになされる。また邪術による攻撃にしても、その理由の正当性を遺族がみとめないかぎり、無実の者にいわれなき攻撃をくわえたという意味で妖術となんら変わるところはない(事例⑩参照)。

親族の死に直面して、あるいは埋葬の場で、女は男とは対照的に声、顔の表情、全身の運動で、激しい、抑制されない悲嘆と心の動乱を表現する。彼女らは号泣しつつ「彼(彼女)がこの人を殺した、彼(彼女)がこの人を殺した」と反復してやまない。彼(彼女)とは、すでに知られている、あるいはいづれ告発されるであろう妖術者の謂である。「人は死ぬとき誰かもう一人を背負って死ぬ」というグシイの諺は、死の直後に社会の非難が特定の妖術者にむけられることを意味する。

死別の状況において被害者意識を強調し、加害者追求の雰囲気をもりたてるのに主導的な役割をはたすのは女

であることが多い。しかも妖術者として告発されるものたいていは女である。妖術者は事例がしめすように、ほとんど死者の妻や母なども身近な親族である。私の事例では死者は大半男であるが、これが女であれば妖術者は僚妻や義母に集中するだろう。

マソングでは老若をとわず全員がよく知っている札つきの、いわば永世妖術者の一群と、具体的な病気や死のケースではじめて妖術者として告発される者との両極がある。後者のばあい、二度三度と告発をうけたり、もともと妖術者の家系の出であったりすれば、やがて永世妖術者の列に押しあげられる。永世妖術者のなかには男も若干名いるが、妖術者らしい行動と関連させて語られることは極端にすくなく、女子妖術者の数と活力にははるかに及ばない。

前節の諸事例で特徴的なことは、死因としての死霊の制裁がほとんど前面に出ていないことだ。病氣、不作、家畜の死などの不幸にたいして古い師が「死霊が(供犠の動物をくうために)家に帰りがっている」との診断をくだすことはきわめて多い。葬礼の折にしかるべき動物を殺さなかったこと、あるいは本来貪欲な死霊が供犠

を要求している——さまざまの前兆がある——のに子孫がそれを怠っていることが不幸の原因として指摘される。このばあい供犠をもとめているのはどの祖先の死霊であるかが占い師によって特定される。

マソングのムワゲンディ・リネージの既婚男子八七名全員につき、どの死霊にたいして供犠をしたかを調べた。男子死霊では祖父と父の双方にたいして十一名が供犠をおこない、祖父のみ二十一名、父のみ十一名。女子死霊については祖母と母の双方にたいして一名、祖母のみ十五名、母のみ三名である。この数字は、男子死霊は女子死霊よりはるかに強力で貪欲だという彼らの意見とよく合致している。

特定の死霊のほかに、一般的、集合的な死霊が存在する(レファランス・タームとしては *chirocha*、アドレス・タームとしては「祖父」*sokoro* の複数形 *chisokoro*)。この集合霊は、虚偽の宣誓、インセストや妻の姦通などの性的違反、クラン成員間の殺傷、割礼の隔離期間中に火を絶やすなどの規則違反等にかんして子孫を罰するものとされる。落雷死と溺死はつねに集合霊による死とされ、死体の汚れのために通常とは異なる埋葬をおこなう。

しかし個性霊、集合霊をふくめて死霊は一般に今日のグシイにおいては子孫を殺すほどの強力な制裁力をもつとはかんがえられていない。死霊の怒りを原因とする災厄は、その当人がやるべきことをやらなかったか、なんらかの過誤をおかしたからこそ招来したものであり、この点で被害者意識にかられて妖術を災因とする立場とは正反対である。

死の直後の狂騒的状况においては死因の追究は、喪失感に打ちのめされた遺族がてんでに妖術者を告発するとうるかたちをとることが多い。占い師や呪医による診断と試罪をもとめることはほとんどない。半狂乱の遺族にとっては死因を第三者による悪意の攻撃のせいにした方がその時の彼らの心的状況に似つかわしい、というのはいくつかの心理学的解決であって、これでは袋小路も同然である。むしろ、死因を死者の自業自得に帰した方が秩序維持のためににはるかに適切なのにグシイではその逆だという点を、今後究明する課題とすべきであろう。

以上のべてきた死霊と妖術・邪術のほかに、重要性においては劣りながら、なおいくつかの超自然的災因が存在する。最後に、それらを列挙しておく。

① 呪詛 (okoragereria) は父と僚母からのものが最強で、他の親族からのそれはほとんど効果がないとされる。災因としては副次的に示唆されるにすぎない(事例⑫⑬参照)。

② 邪視 (ebdirira) は今世紀以降、キプシギス人からグシイ全域に広まったものと推定される。邪視もちは大部分女で、犠牲者の多くは子ども。妖術者とは反対に、じぶんの親族以外の人間に被害を及ぼすとされる。

③ 夜間、戸外の地面にホタルの蝸集をみたり、同じく夜間、屋内で幻視としての光——グシイでは太陽 (eroba) と称する——のなかにヤギの糞や鍬をみたりは、死霊に供犠をしないと災難にままれる。この信仰は近年、ルオ人からもたらされたものとおもわれる。

④ ルオ人、キプシギス人、マサイ人を殺した者、その死体をみたり、彼らに食物をあたえず餓死させた者は、くさむらに祠をたてブザと黒色のヤギをその霊にささげると。これを省略すると、のちのち災害の因となる。

(1) 調査期間は一九七七年から八一年にかけて通算二カ年、調査地は主として、グシイ県ニヤリバリ郡ポニヤキヨ地区のマソングとその周辺。

(2) 本稿は調査時点でのデータの分析を主とするが、約二〇年前の同一テーマにかんする分析としてルヴァイン報告がある (LeVine 1963; LeVine and LeVine 1966, esp. Chap. 9)。二〇年間の社会変化と調査地の違いを反映して、本稿の内容はルヴァイン報告と異なる点が多々ある。

(3) グシイの社会的距離の分析については松園 (一九七九 a, 一九七九 b, 一九八一) を参照。

(4) 葬礼の詳細については松園 (一九七九 b) を参照。

(5) 複婚家族における「実母以外の父の妻(たち)」「および「夫を共有する妻たち」については確立された邦訳がないので、それぞれ仮りに「僚母」「僚妻」としておく。

#### 文献

松園万亀雄 一九七九 a 「冗談と忌避の人類学」、蒲生正男他編『文化人類学を学ぶ』(有斐閣) 所収。

一九七九 b 「グシイの葬礼——二元的人間属性と社会的距離の分析」、『アフリカ研究』第十八号。

LeVine, Robert A. 1963 Witchcraft and Sorcery in a Gusi Community. In J. Middleton and E. Winter (Eds.), *Witchcraft and Sorcery in East Africa*. London: Routledge and Kegan Paul.

—— and LeVine, Barbara B. 1966 *Nyansongo: A Gusi Community in Kenya*. N. Y.: John Wiley and Sons.

Matsuzono, Makio 1981 *Adjacent Generations and Respect Attitudes among the Gusii*. In N. Nagashima (Ed.), *Themes in Socio-Cultural Ideas and Behaviour among*

*the Six Ethnic Groups of Kenya*. Tokyo: Hitotsubashi University.

(東京都立大学助教授)